

杉村楚人冠と柳田国男の交流

東京学芸大学名誉教授 石井正己

柳田国男と我孫子を結ぶ深い縁

柳田国男（旧姓は松岡）は明治 8 年（1875）に飾磨県神東郡田原村辻川（現兵庫県神崎郡福崎町西田原）で生まれた。明治 20 年（1887）、長兄・松岡鼎が医院を開業したので、布川（現茨城県北相馬郡利根町）へ移住する。両親と 2 人の弟は、2 年遅れて、明治 22 年（1879）に鼎宅に同居している。明治 23 年（1890）、柳田は帝国大学医科大学（現東京大学医学部）に在学中の三兄・井上通泰宅に同居し、東京で勉強を始めた。明治 26 年（1893）、鼎は千葉県南相馬郡布佐町（現我孫子市）に移住するが、明治 29 年（1896）に両親が立て続けに他界してしまい、柳田は強いショックを受けた。松岡家の墓所は故郷・辻川ではなく、新たに勝蔵院に設けられ、鼎宅が柳田の帰省先となる。柳田は我孫子で暮らすことはなかったが、しばしば帰省して抒情詩を作ったことが知られる。さらに我孫子は友人の岡田武松や井上二郎の故郷であり、やがて杉村楚人冠が暮らし、柳田にとって我孫子は深い縁を結んだ場所になる。

関東大震災を書いた杉村楚人冠の毒舌

振り返れば、私が楚人冠に関心を持ったのは、平成 23 年（2011）の東日本大震災を経験して、自分たちが暮らす地域・関東の災害を見直そうと思い、大正 12 年（1923）に発生した関東大震災を書いた作家の文章を集めて読んだときだった。楚人冠は「余震」（『大正大震災災誌』改造社、1924 年）で、震災後の東京の変化を皮肉交じりに論じた。それまで横柄な態度を取っていた芸妓や電話交換手は、震災によって汗を流して働く大切さを知り、人々は力を合わせて共存する社会の価値を見出したと述べた。また、建築家や建築請負人・工事監督者は震災で打撃を受けた建築物の責任をなすりつけ合っていると批判した。自分の仕事については自らが責任を負うべきだと考えると、「腹を切って死んだ者のないのが不思議だ」と言う。故意に一時代前の倫理を持ち出して、毒舌によって時代を批判するところはいかにも楚人冠らしいと考えた（石井正己『文豪たちの関東大震災体験記』小学館、2013 年）。

新聞界で活躍した柳田国男と杉村楚人冠

柳田は民俗学者と言われ、新聞界で活躍したことはあまり知られていない。エリート官僚であった柳田は、貴族院書記官長を辞めて、大正 9 年（1920）に東京朝日新聞社客員となって、東北や沖縄を旅して文章を書いた。東京朝日新聞社には、3 歳年上の先輩・杉村楚人冠がいた。しかし、柳田は新渡戸稲造に依頼され、第一次世界大戦の戦後処理のために国

際連盟委任統治委員となって、2 回ヨーロッパを訪れることになる。帰国後、大正 13 年（1924）に朝日新聞社論説委員になり、昭和 5 年（1930）に辞めている。中断があったにしても、10 年ほど新聞界に身を置いて活躍し、そこで楚人冠と出会ったことは重要な意味を持った。楚人冠は明治 45 年（1912）に我孫子に別荘を設け、関東大震災後に移り住んだが、一方、柳田は昭和 2 年（1927）から砧村（現世田谷区成城）に移住している。2 人の住まいは南北に分かれたが、震災後は東京の郊外に住んで、同じ新聞社のジャーナリストとして活躍したのである。そこで、2 人の交流のポイントを 5 点ほど取り上げて考えてみる。

『南方二書』をめぐる柳田国男と杉村楚人冠の接点

1 点目は、自然保護に深く関わった点である。楚人冠は自分と親交のあった人々の情報をまとめたカードを作っていた。その中にはもちろん柳田のカードも存在し、明治 44 年（1911）9 月 24 日に「南方二書以来」とあり、それ以来の付き合いだったことがわかる。『南方二書』は、博物学者・南方熊楠が神社合祀に反対し、東京帝国大学の植物学者・松村任三にあてた 2 通の手紙を指す。この書簡を松村に送ってほしいと南方から頼まれた柳田は、無断で 50 部印刷して関係者に配った。松村は植物保護に関心がないので、送っても効果が薄いと考え、学会や政治を動かすための有力者に送付したのである。送付先のリストに「杉村縦横」と見えるのは、南方や神社合祀反対運動をいち早く新聞で紹介した楚人冠のことである。楚人冠の人名カードと柳田の送付先のリストによって、2 人の交流が『南方二書』から始まったことが確かめられた。自然保護運動によって、南方、楚人冠、柳田のつながりが浮き彫りになった。

日本野鳥の会に参加した楚人冠の皮肉めいた言説

2 点目は、野鳥の趣味という点である。昭和の初めに日本野鳥の会が誕生し、昭和 9 年（1934）に第 1 回探鳥会が須走（現静岡県駿東郡小山町）で開催された。その時に撮影された集合写真に、楚人冠と柳田が写っている。このときは、足強組と足弱組に分かれて、野鳥の声を聞き、巣を観察した。楚人冠と柳田は共にこの会の思い出を『野鳥』第 1 巻第 4 号（1934 年）に残している。楚人冠は「裾野の野鳥」で、この会がおもしろくなかったと述べる。手賀沼周辺でも鳥の巣や卵を見ることができるので、富士と我孫子の違いがわからないからだと説明する。この不満は 63 歳という年齢で山道を歩き回ったことも影響していたのかもしれない。それでも、普段は関われない学者や画家、歌人、また貴族、美人、忠臣、烈婦などと交流できたのは唯一の収穫だったと述べる。また、鳥の巣を見るのはつまらなかったが、鳥の声を専門家に説明してもらって聞けたのはおもしろかったと、この会を持ち上げる。テンポがよく、皮肉が詰まっていて、短いながらも楚人冠らしい文章となっている。

コカワラヒワと老婆の関係を見た柳田国男の民俗学的視点

一方、柳田は「小河原鶉のこと」（「須走から」と改題して、『野鳥雑記』（1940年）に収録）で、日本野鳥の会に参加して、鳥の声を聞き分ける耳を身につけたと述べる。帰宅してから、家の周りの鳥が急に新しく、また増えたと感じたのは、その成果だろう。柳田はこの時59歳だったが、年を取っても教育の機会は案外あるものだとしみじみ回想している。鳥の声に関心を持つという点で、楚人冠と柳田は共通している。また、柳田は、コカワラヒワとその巣があった家の老婆の思い出についても書いている。コカワラヒワは雛を育てるが、老婆は養子夫婦が出稼ぎに出て、小屋に1人で住んでいることを述べる。コカワラヒワと老婆の人生を重ねて見るのは、柳田が民俗学者である証と言えよう。このように、楚人冠と柳田は同じ会に参加していても、感想や視点に違いがあることは重要であり、それぞれの個性が際立つ。



富士山麓探鳥の一行

中西信堂

荒岡戸加松柳菅菅金猪柳金杉内清高内高松三高融北穂窪半柳中金中
 後木川來望田原山原澤川田村田棲兵清太一資一重治列白空良國悟春星
 十茂秋重千夫志恒之枝京人之幸郎郎郎郎郎郎秋忠穂平男堂彦湖

（『野鳥』第1巻第4号）

杉村楚人冠の「猿子のぼる」に答えた柳田国男の葉書

3点目は、「猿子のぼる」をめぐる問答である。2人の言葉をめぐるやり取りで印象的な

のが、楚人冠の「猿子のぼる」（1932 年、『続々湖畔吟』（1935 年）に収録）である。「すると葉末に昇る稲の露」「稲の露するすると葉を昇りけり」という俳句を引き、友人に「露が上へ昇つて行くなんてことがあるものでない」と言われたと述べる。この事象の証人は百姓など実際に稲を育てている人々であるが、科学的な証明がなされていないので、誰か露が昇ることを証明してくれる人はいないかと呼びかけた。この「猿子のぼる」は『アサヒグラフ』に載ったので、その読者に反響を求めたのである。これは、柳田が『郷土研究』で「紙上問答」を行ったのと共通する。楚人冠の問いに対して柳田は葉書を送り、猿子とは実際の猿ではなく、囲炉裏の自在鉤を上下し調整する木の魚形を指し、魚であっても「コザル」と呼ぶところが多く、これが上下するので、露が昇ることを「猿子のぼる」と言ったのだろうと解している。

『和歌山方言集』をめぐる杉村楚人冠と柳田国男の認識

4 点目は、方言への深い関心という点である。楚人冠と柳田は共に関西の出身で東京に出て来たこともあって、故郷で身につけた言葉が心の深くにあり続けた。楚人冠が『和歌山方言集』（1936 年）を刊行した際、柳田は葉書を送っている。『和歌山方言集』は楚人冠の母とみが病床で語った方言に楚人冠が小さい頃の記憶を掘り起こした方言を加え、さらに和歌山へ立ち寄った際に聞いた方言を記録したものである。それらによって、言葉が生きて動いていることを証明しようと考えた。柳田は葉書で「我々の仲間の方言集とは行き方別なれどもそれは始から承知の上にて」と述べているが、楚人冠も『和歌山方言集』は「方言集であつて方言研究ではない」と明言していて、その違いについてよく認識していた。2 人は、考え方は違っても、お互いの立場を尊重する度量を持っていたのである。

柳田国男が「無意識の歴史家」で評価した杉村楚人冠の文章

5 点目は、両者の言葉の問題についてである。柳田は『楚人冠全集』を読み、若かった頃の楚人冠の毒舌ぶりを思い返し、再び読むことで若返ったが、文章は心の働きであり、楚人冠も同様に若返ったのではないかという感想を送っている。さらに、柳田は昭和 13 年（1938）に「無意識の歴史家」（『楚人冠全集月報』12）を書いた。楚人冠は生粋のジャーナリストなので、読者を同時代人に限定しているのに、こんなにも永く伝わり、いつ読んでもおもしろいと述べる。その前提に、楚人冠は文章になるような生活をして、文章と生活が近かったことを指摘する。楚人冠はどんなに流行しても、自分の嫌いな言葉を使わないが、反対に気に入った言葉なら自分の文章にどんどん盛り込んだ。こういった楚人冠の文章の書き方は、年を経るごとに新しく、さらにおもしろくなった。さらに、楚人冠の代名詞とも言える皮肉については、楚人冠の罵倒によって明治・大正の愚かさが見えてくると述べ、歴史を書こうとしていないのに歴史を書いていて、それはまさに無意識の歴史家であると表現した。楚人冠には誰にも譲らない断定の強さがあり、それによって人々を惹きつけるような文章のおもしろさは自分にはないと述べる。

以上、柳田国男生誕150年の年にあたってお話しした楚人冠と柳田の交流の一端である。

(2025年10月5日講演)

参考文献

- ・『我孫子市文化財報告書第2集 楚人冠と鳥』我孫子市教育委員会、2010年
- ・『我孫子市文化財報告書第11集 杉村楚人冠と柳田国男』我孫子市教育委員会、2015年